

募金を通して思ったこと

大分県・向陽中学校 2年 木谷 智哉

「熊本地震復興募金、お願いします。」

今年の4月僕の住む大分でこのような声が聞こえてきた。いつもの募金は、母からもらった100円玉を一回募金箱に入れて終わりというような感じだった。駅前の募金をしている人達が持っている箱にいつものように100円を入れた。すると、

「ありがとうございます。被災者の方々のために使わせていただきます。」

と笑顔でボランティアの人達に言われた。良いことをしたはずなのになぜか気持ちが悪くもやもやした。

バスで家に帰るまで4月14・16日に起こった熊本地震のことを考えた。震源である熊本ほどではないが、僕の住む大分でもかなり大きなゆれを感じた。テレビの映像でしか知らないが、熊本の被害はそのゆれからは想像することができないほど大きなものであった。もし自分があの地震で熊本くらい被害を受けていたとしたらと、考えれば考えるほど自分の募金した100円が無意味であるかのように感じられた。なぜなら、僕の中では被災地の人達のために自分ができることを何かしたいと思ったからだ。それに、ただ持っていた100円を募金しようと思ったわけではない。

家につくと、僕は母に

「家の手伝いでアルバイトをする。」

といった。母は

「どうしたの。何か欲しい物でもあるの。」

と聞き返した。僕は

「被災地で困っている人のために、できることをしたい。現地に直接行って手助けできないからせめて気持ちのこもった募金をしたい。」

と自分の思いを伝えた。その日から、僕のアルバイトがはじまった。目標は

1,000円で洗濯物をたたんだりくつ並べやごみ出しをしたりして1日100円ずつ母からもらった。たった1,000円と普段思っているのに、いざ貯めるとなるとかなり大変であった。しかしお金を貯めることが、目的だったのでアルバイトは苦ではなく、こうしてアルバイトは10日間続いた。募金をするためのお金を貯めはじめて10日目の夕方目標としていた1,000円にようやく達し、僕は街へ行き募金をしている所まで走っていった。

「熊本地震復興募金お願いします。」

前回と同じ声が聞こえてきた。僕は一枚一枚気持ちをこめて100円玉を10枚募金箱へと入れた。

「ありがとうございます。」

という募金箱をもつボランティアの人達の声が被災地の人達のお礼の言葉に聞こえた。

1,000円という額は普段普通に使う額であり、僕の被災者の人達に対する思いをこめた募金でもあった。親から普段もらう1,000円は物を手に入れるために交かんする紙でしかなかった。しかし今思うと本当にその1,000円で欲しい物だけ買っていかない物がなかったのかは疑問である。しかし、被災者の人達のために貯めた1,000円は物を手に入れるために交かんするだけの紙ではなかった。被災地の人達のために何かをしたいということではじめた家のアルバイト。そのアルバイトをすることで自分の思いをこめた1,000円を貯めることができたという達成感。そして、募金という形で自分の思いを実現できた幸福感。僕はこのアルバイトで物を手に入れるということ以上の価値を感じることができた。そして自分の物を買ったりするのではなく、他人のために使うお金としての価値を感じることもできた。

生きていく上で物を手に入れるためには、働かなくてはならない。しかし、物が余って簡単に物を手に入れることができるようになった今お金はただの物と物を交かんする紙ではない。そのために使うことで自分にとっても社会にとってもお金の額以上の価値あるものになると思う。将来の自分の夢をかなえるために使うこともあるだろう。常に何のために使うお金なのかを考えながら価値を感じられるお金の使い方をしていき、考えて今後の生活を送りたい。